島津薩摩歌　嘉永六年癸丑六月廿

掛上　屋まかけしも嵐もけく初雪地

初雪　むさぶるもきもむき谷見岳もし

府牧

右和歌島津齊彬公ゝ薩摩公ゝ藩主ゝ嘉永六年合衆國使船浦賀ゝ来り將軍
家慶公薨去ゝ為り大喪中大賀間大名諸
侯日営書有ゝ島津公ゝ我上杉齊憲公
ゝ同日ゝ和歌ゝ詠ゝ暑中ゝ長日別ゝ南
ゝ宿影ゝ設ゝ詠歌ゝ奏ゝ

早稲田大学図書館
文書27
D 38

あり此歌人各自に詠歌の短冊を得の事を乞
かゝしに拙者も詠ぜしに　明治廿二年二月
十七日拙上杉老公偶然に来賜あり拙短
一紙を呈し賜り仰せの多き事恐縮に歌
今後は一紙を移せり齋彬公の実は我師匠
年も十載長せり洋学薩藩の幼已多年今
日短冊を賜ふ云々老公尊来ありしに
最御年六十六歟　四月十九日沙敷従二位
日七十三歟宴席き皇族法大臣を招て大歓
宴五月廿日薨去せらるゝ短冊を形見なり

二十六年十月十六日誠斎記

安政元年甲寅八月

口演之覚

一昨十三日達て伊勢守殿へ御別
紙書面を以て渡口達て此中吟味の上
達而約定に成候趣を以て
世子御参向凡置候事に付
一同に中面を拾名
から種々義論中之反論紛糾夫人共に不
容易成時節御用
を心得を乞飛向行届を相い打きべく
治乱を不忘治世一事を当時

致通達候様、且又同席中名代ニ而も不苦候
共、格別手当無之候而者、只名目而已之事ニ
実備無之義と存候ニ付、以後者
是非手当行届候様有之度、尤右者上下等
関之家ニ有之候ニ付、及御沙汰候儀ニ候得共
皇国指廻流言ニ而も聖慮被悩候程之事ニ至候而者不測
異変ニ付、今日大和行幸之儀も御達中止ニ相成候ハヽ
却而宸襟を被悩候儀も難計、兼而御達之件、其
右之御旨趣ニ相叶候様、被召寄候上被仰付候ハヽ、伊勢守
殿御請御達ニ相成候様、篤与御勘考之上、御沙汰有之候様致度候、以

頼入候事
右者今般大和行幸ニ而攘夷御親征被仰出候ニ付、五ヶ
月迄之御猶予之事ニ而、最早余日無之、兼而御用途
御沙汰之事ニ成下候而、何分之御沙汰ニ相成候得而、御用捨
何時戦争ニ相成候ても難計事ニ付、其心
得ニ而手当行届候様、其御趣意を奉体、厚く
心掛候様、被遣候様、頼入候事、御請之儀被仰遣候様
尤伊勢守殿へ相通し候事

八月十五日　　松平薩摩守

上杉弾正大弼様

右松平薩摩守殿ヨリ渡候書面ニ付御請伺
書
右ハ当西亜英吉利亜墨利加国ハ和蘭
并北亜米利加ハ久世大和守殿ヲ
測量ニ遣シ和蘭并ニ清国ハ松平薩摩守殿
書物立記ヲ以テ清国ハ大清国ニ於
達清国大清国ハ朝鮮国ニ於
直ニ達シ候事
安政二年乙卯八月
別紙宮内卿ヨリ拝受
明治廿六年癸巳冒十九
宮内省

孝明天皇宸翰

家茂將軍御書

表通写　元治元年甲子

二月

宸翰

朕不肖ノ身ヲ以テ夙ニ天位ヲ踐ミ忝クモ萬世無缺ノ金甌ヲ受ケ恒ニ寡德ノ先皇ト百姓トニ背ンコトヲ恐ル就中嘉永六ノ年以来洋夷頻ニ倡ヘ來港シ國體殆ント亡ヒカラス諸價沸騰シ生民塗炭ニ苦シム天地鬼神ヲ思フテ止ムコト能ハス嘗テ列卿武將ト是ヲ議セシム如何セン昇平二百有餘年威武ノ以テ外寇ヲ制壓スルニ足ラサルコトヲ若シ安リニ膺懲ノ典ヲ擧

ントセハ却テ國家不測ノ禍ニ陷ラン事ヲ恐ル幕府
斷然朕カ意ヲ擴充シ十餘世ノ舊典ヲ改メ外ニ
ハ諸大名ノ參勤ヲ弛ルメ妻子ヲ國ニ歸シ各藩ニ
武備充實ノ令ヲ傳ヘ内ニハ諸役ノ冗員ヲ省キ入
費ヲ減シ大砲艦ノ備ヲ設ク實ニ是朕カ幸ナリ且去春上洛ノ廢典ヲ
非ス　宗廟生民ノ幸ナリ且去春上洛ノ廢典ヲ
再興セシ事尤キ嘉賞スヘシ豈料ランヤ藤原實
美等鄙野ノ匹夫ノ暴説ヲ信用シ宇内ノ形勢ヲ
察セス國家ノ危殆ヲ思ハス朕カ命ヲ矯テ輕率ニ攘
夷ノ令ヲ布告シ亡女リニ討幕ノ師ヲ興サントシ長門

宰相ノ暴臣ノ如キ其主ヲ愚弄シ故ナキニ夷船ヲ
砲擊シ幕使ヲ暗殺シ私ニ實美等本國ニ誘引
スル此ノ如キ狂暴ノ輩必ス討セザルヘカラス然リト
雖モ此皆是朕カ不德ノ致ス處ニシテ實ニ悔慙ニ堪ヘ
ス朕又以為ヘラク我ノ所謂砲艦彼カ所謂砲艦ニ
比スレハ未タ慢夷ノ膽ヲ呑ムニ足ラス國威ヲ海外ニ顯ハ
スニ足ラス却テ洋夷ノ輕侮ヲ受ン欲故ニ頻ニ願フ入
テハ天下ノ全力ヲ以テ攝海ノ要津ニ備ヘ上ハ
山陵ヲ安シ奉リ下ハ生民ヲ保チ又列藩ノ力ヲ
以テ各其要港ニ備ヘ出テハ數艘ノ軍艦ヲ整ヘ無飲

ノ醜夷ヲ征討シ
先皇膺懲典ヲ大ニセヨ去年ハ將軍久シク在京
シ今春モ亦上洛セリ諸大名モ亦東西ニ奔走シ或ハ妻
子ヲ其國ニ歸ラシム宜ヘキリ費用ノ武備ニ及ハザルヿ今ヨリ
ハ決シテ然ルヘカラス勉メテ太平因循ノ雜費ヲ減省シ力
ヲ同フシ心ヲ專ニシ征討ノ備ヲ精鋭ニシ武臣ノ職掌ヲ尽
シ永ク家名ヲ辱ムルヿナカレ嗚呼汝將軍及各國ノ大小
名皆朕カ赤子ナリ今ノ天下ノ事朕ト共ニ一新セントヲ
欲ス民ノ財ヲ耗ス事ナリ姑息ノ奢ヲ為スヿナリ膺懲
ノ備ヲ嚴ニシ祖先ノ家業ヲ盡サヲ若シ怠惰セハ特ニ
朕カ意ニ背クノミニ非ス
皇神ノ靈ニ叛クナリ祖先ノ心ニ違フナリ天地鬼神
モ亦汝等ヲ何トカ云ハンヤ
文久四年甲子春正月

御請写
去月二十七日拜見被仰付候
宸翰ヲ
叡旨者
御即位以来　皇國ニ災禍ヲ悉ク聖躬ノ御上

御反求被為在侯

勅諭ニテ誠ニ以恐惶感泣ノ至奉存侯倩幕府
從前ノ過失ヲ自反仕侯得者多罪ノ至奉存侯
臣家茂不肖ニ身ヲ以テ徒ニ重任ヲ辱カシメ紀綱
不振内外ノ禍亂相踵頻年奉惱
宸襟而已ナラス去春上洛ノ節攘夷ニ勅ヲ奉スト云ヒ
其事實遂ニ難被行横濱鎖港ニ談判スル未タ
成功ニ期限モ難量折柄再　命ニ依テ上洛仕侯上
ハ極テ逆鱗ニ觸レ嚴譴ヲ可相蒙者素ヨリ覺悟仕
侯處意外ニ

宸賞ヲ奉蒙侯而已ナラス至仁ノ
恩諭ヲ以臣家茂並大小名ヲ赤子ノ如ク御親愛
將来ヲ御勸誡被為在侯条臣家茂一身ニ上ニ取
リ海岳ニ鴻恩實以可奉報為様モ無之自今以後
萬事ノ舊弊ヲ改メ諸侯ト兄弟ノ思ヲ為シ心力ヲ
合セ臣子ノ道ヲ盡シ勉テ太平因循ノ冗費ヲ省キ武
備ヲ嚴ニシ内政ヲ整ヘ生民ヲ撫息致シ海防禦ハ
勿論諸國兵備ヲ充実仕洋夷ノ輕侮ヲ絶チ砲艦
ヲ嚴敕シテ遂ニ膺懲ニ大典ヲ興起イタシ御國威ヲ
海外ニ輝耀スヘキノ條件等除以勉励仕候心

宸衷ヲ奉休憩度奉存候事ニ御座候併
膺懲安業仕間敷ヲ
聖慮ノ趣ハ堅ク遵奉仕必勝ニ大策相立候樣可
仕奉存候尤横濱鎖港之儀ハ既ニ外國ニモ使節
差出候御座候得ハ何分ニモ成功仕度奉存得共
夷情モ難測候者沿海ノ武備ニ於テハ益以奮發勉
励仕武臣ニ職掌固守仕大計大議者悉ク國是
ヲ定メ
宸斷ヲ奉仰
皇國ニ衰運ヲ挽回ニテ外ハ慢夷ノ
膽ヲ呑ミ内ハ生靈ヲ保チ奉安
叡慮上ハ
皇神ニ靈ニ報ト奉リ下ハ祖先ノ遺志ヲ継述仕度
奉存候是則臣家茂之至誠懇禱ニ御座候依
之此段御請奉申上候臣家茂誠恐誠惶頓首
謹言　文久四年甲子二月二十日
御請　臣　家茂

一二月廿六日松平陸奥守殿ヶ市ヒ達左之通
一宸翰写　壱通
一御請書写　壱通
二月廿七日御来　内立京万石以上ニ面々ニ供奉

来内ニ付　御出其節勅書御拝見万石以上ニ
面々ニも拝見ニ付　御分依ニ吉ニ廿四日御来　内ニ節
御請ニ付　御上ニ付右　宸翰写并御請書写共
為心得ニ差遣ニ付
移候　今日以ニ城跡ニ交　宸翰写并御請書写
毎通ニ拝伝ニ付書一通ニ付ニ渡ニ又大目付
神保伯耆守ニ渡ニ付ニ渡ニ書ニ付ニ
書ニ写ニ写ニ渡ニ下ニ以上

二月廿四日

松平陸奥守

上杉弾正大弼様

御内密

御書面之趣慎而承知仕候

丙申五月十三日

上杉弾正大弼

人々御中

安政五年　余蒸氣戚臨船を航して
再薩児嶋に到る是國主齊彬公の内約
有るを以てなり公直に船内に来る余
第一に曰く英蘭共に大禍を食む者
凡廿數年大抵古間に出さるなり陸地
さこのめくらに悉く船内に呼び一見を識
を惜めしめんと如何と余甚可なり
変に到て陸続船内に来る公さ
平一貫を余に示して云是鳥津

宮内省

周防と称する者家を弟に譲若
年より学を好む到て今は博聞強
記我の及ぶる所に非ず志操方正厳
格にして家を治め親を敬し和易
温厚なる人柄なり公の恩顧を以て忘れたるが如く新
其意を汲み和業を研究し大
抜して措く能はざる一家
なり公は上使馬上を以て来師
を率ひ磯の別邸に到る時は士
民

既に操練及び造船所の器械雛形
を示し一日可なりを問ふ毛年宴を
張り酒食を設け終日を以て嚢後
公近習密事を命ずる甲河三郎
を出張せしめ第一番の種
新式武器の事を問密和業者に
炮術武器造法の事を問ふ代價を他大
等の質問結て造法の書あるを見
たるに及ぶもの是より後数日

甲河氏未だ面会に至らざるの前に大息永訣告げんと云鹿児島より急報昨夜到る公急病危篤旦夕にあるべしと再報今朝あるも若し不幸にして公去らば百事瓦解を大志何日の日か達せむ呼天なる哉と奈何せん吁告げざるべからず一侍男生を以て国家に尊遇を辱うし公の殊遇を謝し奉る能はざるの安危成敗の如き大なるを云はんや

之を思へば肝摧破せんのみ後訃音に接するに及び慨然思へらく天下世を去る豈図らんや遠謀邦家の為に為すこと一朝水泡に帰せむとは余幸にして島津国侍君を知り終に一生を賜り拝謁し奉り君の力を以て先公の遺志を維持更張せむことを新告げ後数日にして君亦逝き即ち是なり

周防殿

芳翰厚恢復仕候ハ此家所ニ報ゝ時候ニ
蒙ニ候ハ孫ハ此壮健無恙ニ而ハ
御ニ報ゝ君不幸ニ儀ニ遂ニ辭世
聞ハ深情ニ感心肝銘仕ハ賢案
通拙ハ和歌ニ而論國中一同迄
慨ニ堪不雖ニ意端儀ニ出ハ勉ハ業
ニ所置巨細教諭ハ下ニ成厚意
拙自先ニ志ニ出隆國力不及
疲奚様ハ老中ニ中ハ所存ハ出ニ元

何ハ井健ニ御ハ諸事引屈
義ニ而ハ人ニ稱仕ハ先ニ出芽志
謝度ニ出ハ上ハ煙謹言

八月廿八日　周防

麟太郎殿　御報

ハ上ニ而ハ
仕ハ出ハ二ハ和ニ後ニ延川
仕ハ出ハ二ハ出ハ志ニ上

明治三十年三月友吉井君敬舎を
討ハ古左府公夢想且昔年の

時事を論じ益哀悼を禁偶公の
逝報今茲の一事に及ぶ君一
見を与ふ鷹巡中を探る逝報
且尚的の特示附記数帯を以て捧
読一過今又後の一言を記す
賢達の心裏を知る者必嗟賢達
三十数年前明聖公の一言公を云て情
閑強記又方正影格と共一言左府公の
経歴を明察し来たり今茲熟慮を
以て一絲を発て宣他人の称誉千
万言を要せざる思ふもの
勝安芳

島津左大臣履歴

本貫族籍

舊藩

位勳　從一位
大勲位

生年月日　文化十四年十月廿四日

生國郡町村

舊姓名　和泉　三郎

姓名　島津久光

年號	月日	任叙轉免出張賞罰等（辭令書アルモノハ此欄内ニ記入ス）	資格官衙
元治元年	正月十三日	叙從四位下	
仝年	仝月仝日	任左近衛權少將	
仝年	二月朔日	兼任大隅守	
明治二年	三月六日	任參議兼左近衛權中將	
仝年	仝月仝日	叙從三位	
		參議兼中將之事雖無家例	

明治二年三月六日

出格之思食ヲ以テ宣下候事

賜御召古御打袖一領

先般積年勤王之勞ヲ被慰

度　勅使被差下候處早速

為拜謝病中押而登京參

朝之段睿感不淺候依之格

別之思召ヲ以テ別紙之通下

賜候條益以一新之鴻業ヲ

贊補勉勵可有之旨御沙

汰候事

仝　年六月二日

積年勤王ノ称首ト為リ大兵

ヲ擧ケ斷然カヲ朝廷ニ盡シ

戊辰ノ春伏水一戰大ニ賊膽ヲ

破リ天下人心ノ方向ヲ決シ續

テ東北諸道ニ出兵每戰取

捷竟ニ今日平定ノ偉功ヲ

奏シ奉安宸襟候段洵ニ國

家ノ柱石ニ被思召睿感不斜

仍テ為其賞官位昇進被

仰付候事

仝　年仝月仝日

敘從二位　辭退

任權大納言　旧官

三年十月

朕忝ク大統ヲ継キ夙夜憂

勤惟恐皇紀未張萬姓未安

途業實ニ不容易朕深ク苦

慮汝久光朕ヲ股肱羽翼ト

ナリ宜朕カ不逮ヲ助ケ左右群
臣ト同心戮力皇業ヲ賛成シ
朕ヲシテ復古ノ成績ヲ遂ケシ
メヨ今大納言具視ニ勅シテ朕
カ意ヲ告ク其ヲ欽テ之ヲ聽ケ

明治四年九月十三日 積年功勞不少格別ノ思食ヲ
以テ分家被仰出本家島津
忠義賞典禄十萬石ノ内五萬
石為家禄分賜列華族

仝年仝月仝日 叙従二位
先般従二位宣下再三固辭無
餘義被聞食候處今般更ニ
思召ヲ以テ従二位宣下被仰

出候事

六年閏廿八日 老年且所勞ニ付車寄迄乘
馬乘車被差許候事

仝年五月十日 為麝香間祗候諮詢國事

仝年十二月廿日 内閣顧問被仰付
親臨國事御評議ノ節參
候被仰付候事
但大臣可為次席事

七年二月十三日 以思召鹿児島縣ヘ被差遣候
事
汝久光近日鎮西ノ形勢ヲ憂ヒ
自ラ鹿児島縣ヘ赴カント欲シ
上陳ス朕甚其至誠ノ衷情ヲ

感ス今ヤ國家多事ノ際朕カ
左右ヲ離ルヘカラスト雖モ事情
亦止ヲ得サルニ出ツ宜ク急ニ本
縣ニ至リ夫レ能カヲ竭スヘシ尚
速ニ歸京有ラ俟ツ

明治七年　四月廿七日　任左大臣
八年　十月廿七日　依願免本官
仝年　十二月二日　為麝香間祗候
十二年　六月十七日　特旨ヲ以テ位階被進候事
叙正二位
十四年　七月十五日　叙勲一等賜旭日大綬章
十七年　七月七日　依偉勲特授公爵
二十年　九月廿一日　特旨ヲ以テ位階被進
叙從一位
仝年　十二月五日　叙大勲位賜菊花大綬章
仝年　十二月六日　薨去